

宮前遺跡

— 古墳時代から奈良平安時代の集落と中世の遺構群 —

約四十五年前、園部川を臨む羽鳥の住宅建設現場にて、高さ三〇cmほどの「灰色の土器」が発見されました。その後、当時の美野里町に寄贈されて、美野里町公民館で展示されることになりました。その土器は、肩部と胴部下半に紐通しの穴があく耳をもった「須恵器双耳瓶」です。もともとは、水などの液体入れる土器でしたが、「蔵骨器」として転用された可能性があります。しかし、中には火葬した骨がなかったことから、確証はありません。

東海地方の「双耳瓶」と土器に使われた粘土や形態などが類似し



須恵器双耳瓶

ていることから、八世紀中ごろに東海地方の窯で生産されたものと思われま（佐々木一九九四）。

平成二十六年、羽鳥宿張星線道路改良工事に伴って、前述の「双耳瓶」が発見された羽鳥字宮前にて試掘調査を実施した結果、古墳時代の住居跡や中世の遺構群が確認されました。この遺跡は、小字名をとって、「宮前遺跡」と名づけられました。

平成二十七年八月十一月にかけて実施した発掘調査では、古墳時代の住居跡三軒、奈良平安時代の住居跡一軒、中世の遺構群では、地下式坑七基、方形竪穴遺構六基、井戸七基、柵列四条、掘立柱建物跡一棟、溝八条などが確認されました。遺跡の主体は、溝によって区画された十五世紀前半期の遺構群であることが分かりました。

地下式坑とは、出入り口である竪穴を掘って、その底から横穴を掘って空間を造った施設のことをいいます。本来は天井があります

が、調査時には崩落していることがほとんどです。この施設の用途は、墓という説や、食料などを保存する貯蔵庫などがあります。

十六世紀、宮前遺跡周辺の「羽鳥の村」は、小田氏一族の穴戸氏が支配するところでしたが、十六世紀半ば以降、小田氏の勢力が衰退するとともに穴戸氏は佐竹氏の配下の武将となりました。J R 羽鳥駅の南側には、方形居館である羽鳥館跡が所在しており、城主は、小田（羽鳥）刑部治直とされています。宮前遺跡は、井戸や地下式坑など生活に直結した遺構があり、北東七〇〇mに所在する羽鳥館と関連性が窺える城館遺跡であると思われる。

双耳瓶などの宮前遺跡の出土品は、玉里史料館で開催されるケースギャラリー展「発掘調査おみたま」にて展示されます。この機会にぜひご覧ください。

会期

六月四日（土）～七月三十一日（日）



発掘調査区と羽鳥館跡空撮写真（西側より）



発掘調査区（東側）空撮写真

※参考文献

佐々木義則 1994 『茨城県考古学協会誌』第6号 「美野里町出土の双耳瓶」 茨城県考古学協会